



試論 なぜベルギーはテロの温床となったのか

—もうひとつの『連邦制の逆説』?—

2016年3月22日、EUの本部を構えるブリュッセルで連続テロ事件が発生し、200名を超える死傷者が出ました。その半年前にパリで起きた同時多発テロの犯人はブリュッセルを拠点とするムスリム系移民の子孫でした。以来ブリュッセルは「テロの温床」と国際的批判を浴びる様になりました。本来多言語・多民族の「共存」を矜持としてきたベルギーは、どうして「テロの温床」と化したのでしょうか？本報告では、先行研究を整理しながらベルギーが進めてきた「連邦制導入改革」に注目して、その要因を考察します。

■日時: 10月14日(土) 15:10~16:40

■場所: 関西学院大学上ヶ原キャンパス
図書館ホール

■講師: 松尾 秀哉氏
(北海学園大学法学部教授)



■参加費: 無料(一般参加可、申し込み手続き不要)

<講師プロフィール>

1965年愛知県生まれ。一橋大学社会学部卒業。東邦ガス(株)、(株)東海メディカルプロダクツを経て、2007年東京大学総合文化研究科国際社会科学専攻博士課程修了。博士(学術)。聖学院大学政治経済学部等を経て、北海学園大学法学部教授。

著書に『ベルギー分裂危機 その政治的起源』(明石書店、2010年)、『物語 ベルギーの歴史』(中公新書、2014年)、『連邦国家ベルギー 繰り返される分裂危機』(吉田書店、2015年)等。